

赤木文庫本「すみよし物語絵巻」の絵詞について（付・翻刻）

橋 本 直 紀

『住吉物語』につき、赤木文庫蔵「すみよし物語絵巻」を主とし、

他に一、二の優良伝本をも加えて完全な形で影印・翻刻、刊行したい旨を横山あい氏に願ひ出してお許しを得たのは、最早三年以上も前のことであつた。それらの版下用写真の撮影を終えたのは二年前で、そのあと、右計画のことを「御伽草子研究史（昭和五十年以降）」（至文堂「国文学解釈と鑑賞」昭60・10月号）にも記した。

しかし、未見の伝本、未考の問題をまだまだ多く余しており、自らの懶惰のゆえに未だ刊行に至っていないのが現状である。

そこで取り敢えず、中間報告として右赤木本絵巻の絵詞（画申詞）の全文を先に翻刻しておくこととした。何卒諒とされたい。

○

以下に、絵詞（画申詞）そのものに関する若干の注記と、翻刻作業の過程で得た二、三の気づきについて記す（後の翻刻を参照されたい）。赤木本絵巻の本文引用は横山重氏「住吉物語集（本文篇）」

（昭18、大岡山書店）による。

第三図のうち。「きゝしに、まさりぬる」云々は少将の詞としてあるが、恰も地の文の如くである。絵には、春の嵯峨野に遊ぶ姫君と女房たちが描いてあり、そのあとに、姫の野遊びを「ほのきゝて、さきに、しのひおはして、大なる松のかけに、たてかくれて御らんする」（本文、一四四頁）少将の姿を大きく描く。次の第七図共々、絵と本文の交錯が如実に窺える所である。

第七図のうち。「君かあたり」云々は少将の発した歌である。桑原博史氏『中世物語研究―住吉物語論考』（昭42、二玄社）の「諸伝本所収物語和歌一覧」（四一頁）には、赤木本絵巻（桑原氏分類に言ふ第四類、横山本）の、この歌の部分は空白になっている。然して桑原氏は、この歌につき、戸川本に言及され（同書「住吉物語と絵の交渉」、一〇五―六頁）、その第五図にこの歌が書きこまれていることを述べられたあと、「戸川本と同じく本文としてこの歌

をもたないのは、省略本である第一類の絵詞本、第三類の西尾市立図書館蔵藍表紙奈良絵本のほか、戸川本と密接な関係にある第四類の書院部蔵絵巻系の諸本だけであるから、やはり、現存本の原形には存していた歌として考えざるを得ない」と記しておられる（戸川本のことは後述）。多数の伝本の存する『住吉物語』諸本を分類するに、歌の数を以てすることは有効な方法と思うが、本文と絵詞との交錯を勘案するなら、赤木本絵巻の歌数は四十六首ではなく、「君かあたり」の歌を含めた四十七首としてよいのではあるまいか。そして同じことが、赤木本絵巻と同系の宮内庁書院部蔵絵巻また穂久邇文庫蔵奈良絵本にも言えるのではあるまいか。

第八図のうち。「母うへ」の言葉を承けた「まかさせおはしませ」云々は、「ものゝなさをもしらぬ、をんな」（一五六頁）である。「むくつけ」の言葉である。

第九図のうち。「あな、うれしの、ほうしの、いてやうや」云々も同じく「むくつけ」の言葉である。続く「は、うへ」と「中なこん」の会話のあとの「よしなき事、たのまれてきつる物かな」云々は、「六かくたうのほうし（あやしの法師）」の言葉である。このあたり、確信を以て謀を実行するむくつけ女と、内心おどおど、気もそぞろの六角堂の法師の有様が良くえがかれていよう。

第十五図のうち。住吉の浜。「かいとも、花のちりたるやう」に

て、「あきりする女とも、おけといふ物をいたゝきて」（一七三頁）いる図。「うつくしの、かいともや」は姫君の、「大明神に」云々は尼君の言葉か。姫君、尼君、侍従の会話中に住吉明神の名が見えていることは注目ししよう。

第十八図のうち。「はせのくわんおんの、御ちかひにて」云々は少将の言葉。少将は、「すみよしにたつねおはしまして、先大明神にまいり」（一七五頁）、「すみのえにたつねおはして」（一七六頁）のち、「観音の御ちかひたつとく、事ゆへなく、ゆあひたてまつる」（一七八頁）ことになる。

最終第二十三図の後半は酒食を調える場面。些か『鼠の草子』における婚礼の場面に通ずる所がある。

因に言葉の面では、第二十図中の「おさなおひ（幼生ひ）」が用例として目に留まる。

○

さて、戸川本についてである（本文、絵詞とも先掲『住吉物語集（本文篇）』所収）。戸川本は、横山氏の解題に依れば、天地五寸四分（約一六・四釐）、白描に近く、室町中期の書写と思われる由である。口絵図版一葉を見ても成程古拙との印象を受ける。所謂小絵に属するものと思われ、或いは女房絵であるかも知れない。

いま本文は暫く措き、その絵詞に注目するなら、戸川本の絵詞は、

僅かの小異はあるものの、よく赤木本絵巻に合致する。繁を厭わず示せば、次の通り（物語の進行順に、戸川本・赤木本と対にして出す。発語者名は省略）。

①〔戸〕 かないとをし、われはかなくなりなは、しゝうこそ、かたみと御らんせめ

〔赤〕 かないとをし、われはかなくなりなは、しゝうこそ、ゆかりとも御らんせめ

②〔戸〕 一くだりの、御返事は、なにかくるしからぬ、□□ほと□□を□□そ□□／なとり川、わたらは、いかにせん

〔赤〕 一ふての、御かへり事、なにかくるしからん、これほとまたあき夕、をとつれ給ふに／名とり川、わたらは、いかにせんとか

③〔戸〕 君かあたり、いまそ行を、いてゝみよ、恋する人の、なれるすかたを／いかにたちうせたるなら□□（「たちうせ」ノ「う」ハ「よら」ノ誤写カ誤読カモシレナイ）

〔赤〕 君かあたり、いまそ過行、いてゝ見よ、恋する人の、なれるすかたを／いかにたちよらせおはしませ

④〔戸〕 よきやうに、はからひ給候はゝ、いかにうれしからん
〔赤〕 よきやうに、はからひ給候はゝ、いかにうれしからん

⑤〔戸〕 よしなきことに、たのまれて、きつる物かな、もし、とか

めたまはゝ、いかにせん、おそろしや

〔赤〕 よしなき事、たのまれて、きつる物かな、もしとかめなは、いかにせん、おそろしや

⑥〔戸〕 かくは□□の、おそろしき御はかり事の候へは、御□たはしま□、しらせまいらせ候そや／されはとよ、けきの、殿
御ことは、ふしきにおほえ□待り□に、いしくも、き□□□／いかになるへき、あさましや

〔赤〕 かくまで、おそろしき御はかりことの候へは、あまり御いたはしく、おもひまいらせ候て、夢はかり、しらせまいらせ候そや／されはこそとよ、中納言殿の御ことは、ふしきに、うれしくも、きこえたまふものかな、おほえて、たつねまいらせ候に／こはいかに、なるへきそや、あさましや

右の如く、戸川本絵巻断簡の絵詞は総て、赤木本絵巻のそれと見事に重なる。そして同じことが、最早例証はしないが、本文についても言えるのである。

更に絵詞について記せば、桑原氏が第四類として挙げられた諸本のうち、赤木本絵巻に極めて近い宮内庁書陵部蔵絵巻と和久邇文庫蔵奈良絵本については、先掲桑原氏の御著書の口絵写真に依るだけでも、次のことが分かる。即ち、書陵部本図版の絵には、「しゝう」

「三の君」「ひめ宮」「しんすけ」の四人が見えており、侍従（であらう）詞に、

なさけなの、御このみや、おもふはかりの、そてもかなとこそ、
ねかはしきに、うたてしき、御（以下欠）

とある。これは赤木本絵巻の第一図（の第一場）に相当する部分で、そこには、「中の君」「侍しう」「三の君」「ひめ君」「しんすけ」の五人が見えており、侍従の詞は、

なさけなの、御このみや、身にかへ、おもふはかりのこすゑを
である。同様、穂久邇本図版の絵詞に、

みやはらのひめきみ、つねは心をすまし、ひき給ふそや／おも
しろの、ことのねや、いかな^{（るか）}人の、ひき給ふらん

とある部分は、赤木本第三図（の第一場）に相当し、その絵詞は、
宮はらの姫君、つねに心をすまし、こと、ひき給ふそや／おも
しろの、ことのねや、いかなる人の、ひき給ふらん

であつて、ほぼ完全に対応している。これらのことから、いま戸川本、赤木本、書陵部本、穂久邇本相互の直接の書承關係を軽々に言うことは敢て慎まなければならぬが、少なくともこれら四本は、もと共通の祖本から発したか、ということ位は言つて差し支えない様と思う。

桑原博史氏と共に「住吉物語」研究を推進して来られたのは友久武文氏であらう。友久氏の「住吉物語からお伽草子へ」（「文学」昭51・9月号、岩波書店）および④「住吉物語絵巻」の文学史的背景（日本絵巻大成19「住吉物語絵巻・小野雪見御幸絵巻」昭53、中央公論社）は、桑原氏の成果からおよそ十年を経てのものであるが、諸本校勘の緻密さと共に、新見に富んでいる。

「住吉」の系統論（諸本論）および（改作の）原形につき、桑原氏は諸本を全六類に分類され、その第五類（宮内庁書陵部蔵写本八千種本V等）を「現存本の原形のおもかげがもつともよくつたえられている」（先掲書「系統論序説」、一八三頁）とされた。他方、友久氏は諸本を甲類（流布本。藤井本また成田本）、乙類（広本。八千種本Vはこの類）、丙類（略本）、丁類（流布本と広本の中間的存在。横山本絵巻はこの類）の四類に分類され、「改作の原形に近い本は、甲類流布本の祖本以外には求めえない」（先掲の論文）とされた。いまわたくしに「住吉」の諸本論またその原形に立ち入り言及する用意は全くないが、わたくし目下の興味は取りも直さず松本隆信氏がいみじくも述べられた「住吉」の物語文学史上における位置付け、即ち「住吉」は室町期以降においても本文の流動がはなはだしく、絵巻や奈良絵本も数多く作られて、お伽草子と全く交らない享受をされていた「鎌倉期擬古物語から室町期物語草子への

大きな変動の過程を一本の線でつないでいる作品として、『住吉』は物語史上注目すべき存在である。鎌倉期における『住吉』の改作に当つての、平安朝の原作との大きな相違は、長谷観音の示現が主人公の運命を決定づけるという筋が付加されたことであろうと指摘されているように、その時から『住吉』はお伽草子の先駆をなす性格を備えてきたのであろう」（『物語文学とお伽草子』、『体系物語文学史』第一巻所収、昭57、有精堂）にあるので、絵詞（画中詞）を多量に有する桑原氏言われる所の第四類本、友久氏言われる所の丁類本をなお追究し、そこから逆に原形に遡行し得るならば、と思つている。

○

赤木文庫本「すみよし物語絵巻」の絵詞（画中詞）翻刻に当たつては、次の様にした。（㊦）絵に見える文字は総て採つた。（㊧）その場合、人物名のみと人物名・絵詞そして絵詞のみの三様があるが、いずれも天ツメで起こし、人物名に絵詞の伴うものはその絵詞を「」に入れて示した。（㊨）人物名がなく絵詞のみの所は、その絵詞から始め、発話者の推定はしなかつた（本文と併せお読みいただければ大概見当はつくであらう）。（㊩）第二十二、二十三図の絵詞には古い絵巻によく見られる、所謂願番号が付いている。それらは人物名の下に記した。（㊪）各図は一場面その他、二場また三場に亘る場合もある

が、あえて識別はしなかつた。（㊫）わたくしに読点をやや多く入れた。（㊬）なお採録は、基本的には絵にあらわれる願（進行願）としたが、努めて会話が合理的に連続するよう配慮した。

赤木文庫本「すみよし物語絵巻」絵詞

〔絵 第一図〕

中の君

侍しう「なさけなの、御このみや、身にかへ、おもふはかりのこす

えを」

三の君

ひめ君

しんすけ「花はさかりより、ちるこそ、おもしろく候へ」

は、うへ「ひめ君たち、かくともなひ給へは、めやすし、へたてな

く、おもひたまへ」

姫君のめのと「まことに、かやうに、わたらせおはしませは、いま

は、御心やすく、おもひまいらせ候」

中なこん

〔絵 第二図〕

「宮はらの姫君、つねに心をすまし、こと、ひき給ふそや」

「おもしろの、ことのねや、いかなる人の、ひき給ふらん」

侍従「けに、おりから、おもしろの、ことのねや、雲のほかまても、ひき、天人も、御みよ、おとろかすへきそや」
めのと「この、ことのねを、宮にきかせまいらせはや」

〔絵 第三図〕

はるのまへ「御ともの人々は、はるかに、のけまいらせ候、御心しつかに、あそひおはしませ」

ひめ君「千とせまで、かきれるゑたも、いく千世か、へぬらん、ときはなるかけも、うら山しく、なかめ給ふ」

侍従「まことに、人めも候はず、よき御なくさみかな」

はりこのまへ「もえいてたる、松のみとり、うつくしき、たくひなや」

三の君

中の君「あら、おもしろの、春のけしきや、人めも候はず、姫君、

うちとけて、御さんさせおはしませ」

へんの君「これ、御らんせよ、うつくしの、みとりや」

「きんしに、まさりぬる、すかたかなと、うちおとろき、まほり給

ふ」

〔絵 第四図〕

少将「よしのくおくにも、こもりなは、さすか、あはれとも、おほ

し候はんぞ」

しろう「一ねんほつきと、申候へは、かならず、みちひきおはしませ」

〔絵 第五図〕

しろう

めのと「あな、いとをし、われ、はかなくなりなは、しろうこそ、

ゆかりとも、御らんせめ」

ひめ君「たよ、おなし道に、ともなひ給へ、のこりても、いかになるへき」

〔絵 第六図〕

しろう「一ふての、御かへり事、なにかくるしからん、これはとまで、あき夕、をとつれ給ふに」

ひめ君「名とり川、わたらは、いかにせんとか」

〔絵 第七図〕

「君かあたり、いまそ過行、いて見よ、恋する人の、なれるすかたを」

侍従「いかに、たちよらせおはしませ」

〔絵 第八図〕

母うへ「よきやうに、はからひ給候はよ、いかにうれしからん」

「まかせおはしませ、いままふと、おもひいてまいらせ候事の、

候そや」

〔絵 第九図〕

「あな、うれしの、ほうしの、いてやうや、いかに、きたのかた、うれしくおほすらん」

はうへ「このほど、わらはか、申候つる事を、いつはりのやうに、

おほしつる、あれは、そらことかや」

中なこん「あな、あさまし、かくまでこそ、おもひもよらね」

「よしなき事、たのまれてきつる物かな、もしとかめなは、いかにせん、おそろしや」

〔絵 第十図〕

式部「かくまで、おそろしき、御はかりことの、候へは、あまり、

御いたはしく、おもひまいらせ候て、夢はかり、しらせまいらせ候そや」

侍従「されはこそとよ、中納言殿の、御ことのは、ふしきに、うれ

しくも、きこえたまふものかな、おほえて、たつねまいらせ候に「しう「しかくの、御はかり事をしらて、すこしつる事の、心う

ちよ」

ひめ君「こはいかに、なるへきそや、あさましや」

〔絵 第十一図〕

ないしのすけ「まことに、千鳥のともをうしなひたるやうに、あら

んなと、姫君たちも、御申候そや、いかにそや、うちまいりな

とも、とまりおはしませは、さそ、ほひなく、おほしめすらん」

しう「へたでなく、あさ夕、ともなひおはしまして、御とをくならは、いかにかなしからん」

三の君「けに、さそ、なに事につけても、むかし恋しく、おほしめすらむ、はなれたてまつりなん事をこそ、かなしく思ふに」

中の君「いつれも、露けき、御袖のうへ、心くるしうおほえて」ひめ君「おもふかひなき、世の中も、うらめしくて、はなれたてまつりなは、（はか）あれとも、おほしいつへきそや」

〔絵 第十二図〕（コレヨリ、下巻ナリ）

「あなあさまし、何とかなりぬらん、せめて、うつせみのかをさへ、とめぬ事の、かなしきよ」

「このほど、御なみたかちなりしは、かやうの事、おほしたつゆへにて、ある事かや」

〔絵 第十三図〕

しう「あら、おもしろの、うらくのけしきや、宮こならは、ひめ君、御らんさせおはしますへきか」

ひめ君「けに、思ふ事なくても、見はや」

〔絵 第十四図〕

「いつくに、いかなる、すまるにて、かくいひおこしつらん」

三の君

きたのかた「そのつかいを、うしなひつる事の、かなしきよ」

〔絵 第十五図〕（詞ナシ）

〔絵 第十六図〕

「うつくしの、かいともや」

「大明神に、御まいり候はんするか、日もくるゝに、かへらせ給へ」

〔絵 第十七図〕（詞ナシ）

〔絵 第十八図〕

「はせのくわんおんの、御ちかひにて、たつねまいり候そや、さなくは、ここに、おはしますと、いかてしるへき」

「神仏の、しるへならては、いかにとして、これまで、おはしますへき、めてたや、うれしや、たゞいま、くわんはく、かけ給ふへき、君にて候物を」

「いかほど、御心つくしおはしましたつれとも、ひめ君、露ほとも、

さゝいれ給ひ候はねは、はしめよりの、御心さしにて候そや」

〔絵 第十九図〕（詞ナシ）

〔絵 第二十図〕

上らふの御かた「住よしより、御のほりの時は、ゐなか人とて、世におかしきやうに、申さふいしか、御見さまこそ、うつくしからめ、かく、とりく、いてき給ひて、めてたの御くわほうや、た

めしも候はぬそ」

かすか殿「大納言殿の、みやはらの、ひめ君とて、たくひなき事に、

申せうそとよ、さききたちに、さたまり給ひ候か、まはりの、

さんげんにて、うせ給ひしとかや、中将殿に、御えんこそ、あり

つらめ」

「この若君は、少将の、おきなおひにて候そ」

「ひめ君の、うつくしう、おひたち給ふ物かな、御かとへ、たてま

つらん」

ひめ君「ちかゝなる、すまるをも、しらせたてまつらぬ、つみふかさよ」

中将殿「まことに、とりくなる、おさなきものともをも、御らんさせたく、おもへとも、きたのかた、おそろしき、人なれば、いかなる事をも、したまわは、御ためいかと、おもふはかりそ」

しゝうのないし

御ちの人「この若君は、なをうつくしく、御入候そや、大納言殿に、

御らんさせはや」

ほり川「まは、世にたくひなき事とも、はからひ給ひし時、い

とをしく、おもひまいらせ候て、しのはせまいらせ候つるに、かくまで、めてたき御世に、あひ給ふ事よ」

〔絵 第二十一図〕

中将

大なこん「このひめ君の、うつくしきに、ふと、いにしへの、思ひ
いてられて候そや、ゆるし給へ」

くわんはく殿「けに、さそ、おほしめすらん、子を思ふみちは、た
れもおなし事そや、めてたく、やかてあひ給ふへきそや、御心や
すく、おほしめせ」

こかう殿「神ならぬ、御身とて、しらせたまひ候はぬ、いたはしき
よ」

御まこ「上らふたちと、御らんせは、いかはかり、いとおしく、お
ほしめさん、しらぬ道に、まよふこそ、まことにかなしけれ」

「あなあさましや、かくまで、おもひたまふを、夢にも見せたま
つらて、すこしける事こそ、かなしけれ、御おもひには、としも
よらせたまふそや、あさましや」

「たゝいま、かくとも申たく侍れとも、中将殿の、いかゝおほしめ
さん、あらいたはしや」

〔絵 第二十二図〕

北の御かた・五「うつゝな事ともや、世ににたる物は、おほきそ
や、ひめ君、うせ給ひても、十とせはかりに、なるほどまで、み
やこのうちに、おはしますきは、大納言殿に、しのひ給ふへきかや、
ういの空なる、あて事や、ためしなや」

ちふきやう・四「まことに、まいらせられ物こそ、おほきに、ふる

めかしき、うちきの、まいり候も、いか様、いはれ候へきそや」

大納言・一「ふしきや、これは、たいの君に、きせせめし、うちき
そや、老のひかめかや、よくく、見給へ」

中の君・二「けに、あら御なつかしや、まかふへくもなし、いにし
への、御うつりかまで、のころそや、このほど、あなか人とて、
おはしますと、きくさふらふ、ひめきみにて、御入候か、うれし
や」

三の君・三「いか様、まつおはしまして、ふしんを、はらし給へ、
うたかふところも、候はぬそ、ひめ君の、御入候そや、とくあひ
まいらせ候はや」

〔絵 第二十三図〕

大納言・二「まことに、姫君たちは、ふひんにおもひ候そや、うれ
しくも、のたまふものかな、この若君、ひめ君たちに、みせ候は
ゝ、いかにうれしからん」

ひめ君・一「中の君、三の君は、をろかにおもひたてまつらす、か
す（かた）なる、御すまゐ（まゐ）□、いとをし、三てうへ、御むかひまいらさ
せ給へ」

ひめ君

たいの御かた・三「さ候はゝ、御むかひを、まいらせ候て、ひめ君

たちを、よひまいらせ候はんするぞ」

わか君

姫君

大將殿「御さか月は、なにとて、まいらせぬぞ」

若君「御にはの、もみちにて候、ひめ君に、まいらせ候はん」

しうのないし

ほり川殿「きたの御かたは、うらめしく、おほゆれと、ひめ君たちの、御いとおしきぞ、なをさり、かすかなる、御すまるにて、ね

をなき給ふと」

少將「はやく、まいらせられ候へ」

こさいしやう殿「はや、御さか月、まいらせ候はんは、いか」

みんふきやう殿「三こんすき候は、やかて、くこ、まいり候へ、

きくて」

しんすけ殿「うつゝなの人々の、御つほね候そや、ものゝまいり候

に、いてさせたまへかし」

こかうの殿

くらんと「ことくく、くこは、したゝめまいらせ給そや」

(以上)